

## 楠山修作先生を送る

武田 秀夫

楠山修作先生は、京都大学卒業後長らく高校で教鞭を執られた後、平成七年四月に本学文学部アジア文化学科に伊原沢周教授の後任として就任された。先生は、本学就任前の平成三年、それまでの長い高校教諭在任中の研究成果を「中国古代国家論」として纏められて、京都大学より文学博士号を授与され、平成二年に『中国古代国家論集』として出版されておられた。

またその出版より一三年前の昭和五十一年既に先生は、『中国古代史論集』を世に問われておられた。

教諭として多忙を極められておられたことは想像に難くないことで、そうした必ずしも環境に恵まれていない中で研究の継続は当人のみにしか分らぬこととはいえ、多くの困難との戦いを強いられたのではなかったろうか。先生はそのことを一言も漏らされなかったが、恩師の御一人宮崎市定先生宅を訪ねられた折、「君は、高校現場で無事勤めを終え、研究も続けて来た。ご苦労だった」という意味の言葉を耳にされ、「あやうく嗚咽するところを辛うじてこらえた」（宮崎市定先生を憶う『東方学』第九一輯所収）と述懐されているのを読み、胸を熱くするばかりであった。

先生の学問・研究を支えていた情熱は何であったのであろうか。先生は先の一文の冒頭に桑原武夫氏の学者を読書家と観察者の二つのタイプに分ける説を紹介され、宮崎先生はその両者を一身に兼ねられた稀有の学者であったことを敬意を籠めて披瀝されておられるが、先生ご自身も私にはそうとしか思われない。歴史家として疑問を抱いたこと、

また課題として課した問題を徹底して追及するためには、なによりも歴史的事実を解明しなければならぬであろうが、歴史上の疑点、あるいはまたどのような課題であろうとも研究史上の難問である。解明は容易ではない。

先生は、歴史の真なる事実を、人間的眞実の下において追求、解明されようとしたのではなかったろうか。読書家と観察者とは渾然一体となった真摯な人間的歴史家の姿を、またその苦渋に満ちた温顔を思い出すばかりである。先生の事実と眞実を巡っての多くの論考は、どれも率直な論争に満ちたものである。

本学就任後も、先生は熱心に学生を教育、指導されるとともに、着実に研究を積み上げられ、平成一三年度の本学文学部研究助成対象論文に認定され、助成金の交付を得て『中国史論集』を上梓された。

先生に、高校教諭時代と大学教授時代との違いを直接お聞きすることはなかったが、もしお聞きしたとすれば、先生はどう答えられたであろうか。

豪快無比かと思えば、繊細磊落、豪胆親切。直情径行かと思えば、瀟洒万丈、洒脱霄壤。

煙に巻かれてばかりの私は、オイもう少しまともな勉強をしないな、今はそんな先生の言が空耳として聞こえてくるばかりである。

最後に斗酒なお辞せずの先生にお願いがあります。同僚の一人が、美酒を愛するが故、健康に気がつかっているんだ、との言を漏らされたことを思い出し、再び少々嗜みに舌鼓されますまでに、ご無理をなさらず、悠々自適を思う存分活かして健康を回復されますことを。